

当医院における1990年と1995年の初診患者の実態調査と患者管理システムの紹介

○古澤潤一 田中克明 大野秀夫

おおの小児矯正歯科（下関市）

近年のこどもの歯科疾患の構造的変化（ウ蝕の減少、不正咬合・歯周疾患・顎関節症の増加など）や、地域住民の歯科医療に対するニーズの質的变化などから、我々臨床医の歯科医療サービスは変容しつつある。

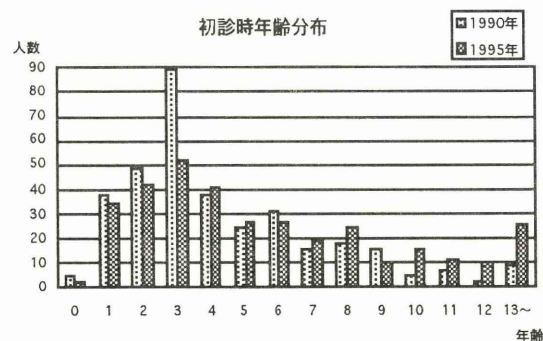
当医院は1988年5月山口県下初のこども専門の歯科として開設され、成長発育期の包括的な咬合育成を目指して地域歯科医療に従事してきた。しかしながら当医院においても患者管理システムを変革し、時代に即した医療サービスの必要性を痛感している。

そこで今回、小児の咬合育成の在り方、医院運営の方向性を再検討するため、1990年と1995年の初診患者の動向について実態調査を行ったので報告する。

【調査方法】

調査対象：1990年（来院患者の動向がある程度安定したと思われる開業3年目）および1995年の4月1日から9月末までに当医院に初めて来院した患児1990年346名、1995年340名であった。調査項目：初診時年齢分布、主訴、居住地の地理的分布、来院動機、疾患、ウ蝕歯数、転帰などである。

【結果】



学童の食生活の現状について

○内藤真理子、西田郁子、木村光孝

九歯大・小児歯

【目的】

現代の小児の食生活には、偏食をはじめとする多数の問題が指摘されており、それらの弊害が多岐にわたることが明らかになっている。小児歯科の分野においても、小児の咀嚼機能低下と食生活との関連は見逃すことのできないものとなっている。そこで今回、小児の食生活の現状を把握する目的で、小学校児童2,584名を対象に、食生活に関する調査を実施し、検討を加えた。

【方法】

福岡県内の公立小学校に通学する3年から6年までの児童、男子1,336名、女子1,248名、計2,584名を対象に、1995年6月、質問票による調査を実施した。各設問に対して三者択一方式による自筆の回答を得たのち、検定を含めた分析を行った。

【結果】

食物の咀嚼速度や喫食に要する時間に関して、普通であると回答した率が高く認められた。また、食品のかたさについて、柔らかい食品を食べると回答した率は、著しく低く認められた。今回の結果より、食習慣および食生活における問題点が顕著に示されることはなかったが、児童の認識と実際のあり方にどれほど差があるかは疑問の残るところであり、この点が今後の検討課題と思われた。